pure Love

蛟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｐｕｒｅ　Ｌｏｖｅ

【Ｎコード】
Ｎ８７３６Ｋ

【作者名】
蛟

【あらすじ】
大国の騎士と孤児の少女の淡い恋物語。
愛する少女に忠誠を誓う騎士だが、少女はそれを拒み続ける。
自分は貴方に相応しくないと。
これはそんな不器用な二人を見守る物語り。

first contact

貴方に側にいてくれって言われた時、凄く嬉しかった。

でも、とても辛かった。

私は貴方には釣り合わない。

貴方にはもっと相応しい女性がいる。

私では貴方に恥をかかせてしまう。

こんな辛い想いするぐらいなら貴方に出逢わなければ良かった。

叶わぬ恋などするんじゃなかった。

私は、幼い頃に両親を亡くした。
家はとても貧しく両親は私を育てる為、死に物狂いで働いた。
結果、両親は死んでしまった。
あぁ、私が殺したんだ。
私が産まれて来なければ両親は今も幸せに笑っていたはずだ。
ごめんなさい。
ごめんなさい、産まれて来て。
私は両親の後を追おうと川に入った。
このまま、流されていけば両親に会えると思ったからだ。
冷たい。怖い。苦しい。
でも、これで両親に会える。
その願いは叶わなかった。
意識を手放す直前、誰かに手を掴まれ川から引き上げられたのだ。
「おい！大丈夫か！？」
黒髪に黒い瞳。
私より少し年上な少年が私の頬を叩いていた。
あぁ、死ねなかった。
そこで私は意識を手放した。

beloved girl

誰かが私の頭を撫でている。
とても温かく心地よい。

誰？
父様？母様？

違う。
これは大人の手ではない。

これはあの時の手。
川から私を引きずり出してくれた手。

「……ん」
私はうっすらと目を開ける。
部屋は薄暗く、殺風景だ。
シーツに枕も真新しいが、微かに汗臭い。私は微かな不快に小さく身を捩る。

すると温かな手は退いてしまった。
もっと撫でていて欲しかったのに……

「気づいたか」
男の子は小さく微笑み、私の頬に手を当てる。

「どこか異常は感じないか？水、飲むか？」
優しく私に問いかけてくる男の子は黒髪に黒い瞳。
成長したら美青年になるだろう顔立ち。

うん。と答えた私の背に手を回し、起き上がる手助けをしてくれる。

ゆっくり飲めと水を手渡された。
言われた通りゆっくり喉を潤す。

「お前、名は？」
男の子は私の目を見て優しく問いかけてくる。

「エリア」

「エリアか。俺はディア・ガルシア。騎士見習いだ」

えっ？騎士様？
私はコップを落としそうになりワタワタしてしまった。

「もっ申し訳ありません！騎士様の手を煩わせてしまって！」

私は慌ててベットから立ち上がり、部屋の隅に下がろうとする。

その時だ。
急に立ち上がったため軽い目眩を起こし前のめりになってしまった。
アッ！と思った時には私は騎士様に抱き止められていた。

「急に立ち上がるな。まだ寝ていろ」
まだ幼いがガッチリした身体だ。

私は抱上げられベッドに戻された。
なんたる失態。
騎士様に無礼にも程がある。
私は何も言えずベッドに沈む。

「まだ見習いだ。それより、エリア。ご両親に連絡を取りたいのだが。もう夜だ。今頃心配しておられるだろう」

騎士様はくすりと笑い、私の頭を撫でてくれた。
そうだ。
父様、母様……
会いたい。会いたい。
目から止めどなく涙があふれでてくる。

「…すまない。泣くな…」
騎士様は私の様子から両親は居ないと判断したのだろう。
より優しく頭を撫で、指で涙を拭ってくれた。

「泣くな…頼む」
騎士様は必死に私を泣き止ませようとして下さる。
だが騎士と言えど男の子。
女の子の涙には弱いようだ。
私も涙を止めようとするが駄目だった。
会いたい。会いたい。
父様と母様に…

コンコン

私の鼻をすする音と騎士様の慰めの言葉が満ちる部屋にノックの音が響く。
ノックをした人物は騎士様の返事を待たずドアを開け、中に入ってきた。

「おや！ガル、あんたもう女を泣かせる年になったんだい？流石だね～」

そこにはエプロンをした恰幅の良い優しそうな女性が立っていた。

――――

この世界では騎士は選ばれた者しかなれない物。
身分など関係なく、完全な実力制だ。
騎士となった者は王により身分と権利を与えられる。
王族以下、貴族以上の騎士という身分を。
そして、国に従わず己が定めた者に忠誠を誓う権利を。

――――――

よって、騎士見習いと言えど近い将来騎士になる可能性が高いガルシアの部屋に堂々と、気軽に話しかけながら入れる者はそうそういないはずだ。

「マティー！変な言い方するな」
ガルシアは軽く睨む。

「さぁさぁ！後は私に任せて。ガルは訓練に行きな。今日は夜間訓練だろ？隊長様に怒られるよ」
しっしとマティーはガルシアを追いたてる。

「隊長には事情を話してある。今はエリアの側に居てやりたい」
ガルシアはムッとしマティーに言い返す。

「あんたもまだまだお子様だね。女は泣き顔を見られたく無いもんだよ。気を利かせな」

「…分かった。エリア、ゆっくり休め」
ガルシアは大人しく引き下がる事にしたようだ。

「そうだ。この子、私の部屋に移すからね」

「なっ！？何故だ？俺の部屋で構わないだろ」

「ガル、もう女を囲う気かい？まだ早いよ。兎に角、この子は私の目の届く所に置くからね」
マティーに口では敵わないと分かっているのかガルシアは悔しそうに部屋を後にした。

「さぁ、顔を拭いてやろうかね。全く、ガルったら。こんなに擦って、赤くなっちまってるよ」

マティーは暖かいタオルで優しく顔を拭いてくれる。

「あんた、エリアって言うのかい？可愛らしい名だね。あたしゃ、マティーだ。この騎士舎の家政婦さ。主に騎士見習いの子達の世話をしている」

道理でガルシアとも気軽に話せる訳だ。

マティーは騎士達にとって母のような存在らしい。

「あの…ありがとうございます」

「いいさね。なんにも心配要らないよ。エリアも私の可愛い娘だ。嬉しいね、ここにはムサイ息子達しかいないから」

マティーは私を優しく、強く抱き締めてくれた。

娘？

私は訳が分からなかったがマティーに抱き締められ安心したのか再び意識を手放し眠りについた。

その後、私はこの騎士舎で働く事となった。

マティーの娘として養子になり。

これには裏が有ったらしい。

ガルシア様と出会い、数年後に知ったことだが。

ガルシア様は騎士隊長様に頼み込み、マティーが王様を脅したらしい。

王様曰く
『あの時程、恐怖を感じた事はない。私の死を、いや――国の滅亡を覚悟した』

a lady_in_waiting

「エリア、明日からあんた、ガルの専属侍女だよ」

ガルシア様が騎士隊長になられて数週間後、突然マティーから告げられた。

――――

マティーの娘として騎士舎で働き始め十数年。

六歳だった私は今年十八歳だ。

ガルシア様は若干二十五歳にして騎士隊長に任命された。

寡黙な方だが周りの大人達から可愛がられ、部下の信頼もある方だ。

助けて頂いた日から何かと気にかけて頂いてる。

私が騎士舎で働き始めてすぐ、黒い石の付いたネックレスと片方だけのピアスを頂いた。

『常に身につけ、人に見えるようにしておけ』と。

ふと気づくとガルシア様も同じく片方だけのピアスをしていた。

何か意味があるのかしらとマティーに聞くとその内分かるさとニヤニヤされた。

仕事仲間に聞いてもキャーキャー言われるだけ。

他の騎士様に聞いても言葉を濁される。

思いきってガルシア様に直接聞いてみると『印だ』とだけ言い頭を撫でて下さる。

印？なんのだろう…
不思議に思いながらも可愛いしなりよりガルシア様とお揃いは嬉しいので肌身離さず身に付けている。

話を戻そう。
ガルシア様は騎士見習いから騎士になられ、王様より称号と権利を頂いた。
だがまだ忠誠を誓う主は居ないようだ。
いや、居るらしいがまだ早いそうだ。
相手も自分も。

普通、騎士になられた方は専属の侍女をつけ、身の回りの世話をさせる。
見習いの内は最低限の事は自分でやり、洗濯などはマティーや専属を持たない私の様な侍女がまとめて行う。
だが、ガルシア様は騎士となった後も専属はつけず、自分でしている。
忙しい時や、疲れている時はわざわざ私に頼みにいらっしゃる。

私も出来るだけお手伝いしてるのだが、騎士見習いの子供達のお世話で忙しく、お手伝い出来ない時がある。
その時は他の侍女に私が頼もうとするのだが、それならば自分ですると言い無理をなさる。
ガルシア様に無理をさせるわけにはいかないので、子供達のお世話を仲間に任せ私がガルシア様のお手伝いをしている。

何故かガルシア様はマティーと私以外の女性から世話される事を嫌う。
騎士になられてから専属をつけろと先輩騎士様に言われ私を指名し

てくださった。
だが、当時まだまだ新米の私。
この子はまだ早いとマティーが言うと『ならば専属は要らない。自分でする』と言い侍女をつけなかった。
しかし、騎士隊長となられた今、それでは下の者達に示しがつかない。と、言われ再び私を指名して下さったらしい。

私は確認をとるためガルシア様の部屋へと足を向けた。

コンコン

「…誰だ」

ドアをノックすると低く不機嫌そうな声が返ってきた。
マズイ。
もう九時を過ぎていた。
朝が早いガルシア様はもうお休みになっていたのかもしれない。

「夜分遅くに申し訳ありません。エリアです」

ガチャ
「どうした？」

訪ねた理由を話そうとしたらすぐドアを開けガルシア様が出てきて下さった。

―――上半身裸で、髪が濡れた状態で

引き締まった身体。
無駄の無い筋肉。
逞しい腕。
厚い胸板。
痛々しい剣の後。
先輩侍女達が抱かれたいと良く騒いでいた。

「あっ…あの…」
私は思わぬ出来事にわたわたとガルシア様に背を向ける。

「申し訳ありません。出直して参ります」

「構わん。取りあえず中に入れ。寒いだろ」
ガルシア様はドアを大きく開け、中へ入るよう促して下さる。
私はガルシア様を見ることが出来ず立っていたがきっとガルシア様は私が部屋に入るまで辛抱強く待つのだろう。

「…失礼いたします」
私はガルシア様を見ないように目線を下げ部屋に入った。

「お風呂に入っていらっしゃったのですか？」
私は勧められた椅子に腰掛けながら話しかける。
ガルシア様は普段からあまり喋らない方だ。
先輩騎士様から話しかけられれば答えるが自分から話しかける事は滅多にない。

「今上がったばかりだ。…あぁ、すまん」

ガルシア様は私の様子に気づいたのかシャツを着てくださった。
「で、どうした？」
先程とは違い低いが優しく問いかけて下さるガルシア様。
何故か私には良く話しかけて下さる。
「あの…専属侍女の件ですが。私なんかで宜しいのですか？」
恐る恐る問う私を見て、はぁー、と溜め息をつき頭をガシガシと拭くガルシア様。
やはり、私ではなく他の人間に頼めば良かったと思っておられるのか。
こんな夜更け部屋を訪ね、裸位でこんなに動揺する女、迷惑だと思っておられるのだろう。
ガルシア様の溜め息に私は心臓がズキンとする。
しかし、ガルシア様は全く違う事を言ったのだ。
「わざわざそんな事聞きに来たのか。俺はあの時もお前しか指名しなかった。お前が俺の専属侍女は嫌だと言うなら仕方ない。俺は今まで通り自分でする」
「！嫌だなんてとんでもない！ガルシア様のお世話なら喜んでお引き受けします！」
私は思わず椅子から立ち上がり叫んでいた。
ガルシア様は何も言わず私の頬に手を寄せニコリと微笑んで下さった。
「っ！～～明日からお願い致します」

私はガルシア様の微笑みと行動に顔が真っ赤になるのを感じた。
ガルシア様はたまに周りを気にせず私を抱き締めて下さったり、額や頬にキスをして下さる。
恥ずかしいから辞めて下さいと言うとただ微笑むだけ。
その微笑みも無駄にカッコイイ。

「あぁ、頼む。…部屋まで送る」

ガルシア様は紳士だ。
例え同じ建物でも部屋かマティーの側まで送って下さる。
一度断ったら何も言わず肩に担がれ部屋まで連行された。
それからは素直に送って頂いている。
ガルシア様曰く、ここは飢えた狼どもの住みかだそうだ。

さぁ、明日から頑張ろう。
命の恩人であるガルシア様の為に。

exclusive a work

専属侍女一日
☆朝、指示された時間に起こす
☆身支度のお手伝い
☆朝食の給仕
☆見送り後、掃除洗濯ｅｔｃ
☆帰宅後、夕食の給仕
☆湯殿の用意
☆その後は主の指示を待ち退出

フムフムと先輩侍女に聞きメモをとるエリア。
得意気に話す先輩侍女は副隊長の専属侍女だ。
二十代前半の彼女は専属になり早三年。
三十代前半の副隊長に気に入られ専属になったらしい。

「まぁ、それは通いの専属侍女の仕事の流れ。私みたいな住み込みはね…」
ニヤニヤと先輩侍女はエリアを見る。

そう。
専属侍女は二通り存在する。
侍女専用の大部屋で寝、専属騎士の世話をする者。
そして、通いを二，三年経験後、専属騎士の部屋で寝泊まりし世話をする者。
この先輩侍女は後者のようだ。

「一緒のベットの中で朝を迎え、一緒のベットの中で夜を迎えるの

よ。騎士様の性欲を満たす事も仕事の内よ」
妖艶な笑みを浮かべエリアの頬を撫でる先輩侍女。
最初意味の分からなかったエリアだったが理解したとたんボッ！と顔を真っ赤にする。
「そんな！私には…出来ません。やっぱりお断りしなきゃ…」
「あぁ～エリアそんな顔しないで～」
うるうると涙を溜めるエリアを見た専属侍女は慌てている。
侍女達は幼いエリアをとても可愛がっている。
エリアの境遇を知っている事もあるし、素直で一生懸命な姿が可愛くてしょうがないのだ。
「冗談よ～そんなことしなくても良いのよ。住み込みでいるのはそれなりの階級の騎士様は忙しくて不規則な生活をしてらっしゃるでしょ？同じ部屋に居た方が対応しやすいのよ」
「…確かにガルシア様も朝方帰ってらっしゃる時があるわ」
「ねっ？その為の専属侍女よ。それに住み込みになるのは二、三年したらよ。まぁたまには一緒のベットって言うこともあるけどね…」
「えっ？」
「それは、副隊長様が私を愛して下さっているからであって…」
もじもじと恥ずかしそうに言う先輩侍女。
そう、この侍女と副隊長は恋仲なのである。

これは、周りも認めている仲だ。
彼女は中級階級の令嬢であり、花嫁修行として騎士舎で働いていたが、それを副隊長に見初められたのだ。
釣り合いもとれているため二人が夫婦となるのは時間の問題だと言われている。

「エリアは何も心配しなくて良いのよ。ガルシア様はあんたのこと本当に大切に思ってらっしゃるわ。あんたの嫌がる事はしないわよ。あんたはガルシア様がお仕事しやすい様にお手伝いして差し上げれば良いのよ」
優しくエリアの頭を撫でる先輩侍女。

「うん、ありがとう」
エヘヘと嬉しそうに笑うエリア。
その風景は仲良い本当の姉妹の様だ。

「さぁ！そろそろ騎士様達が帰ってらっしゃるわよ。今日はエリアの指導を任されたから掃除は簡単にしかしてない。けど、お食事はしっかり作んなきゃね！」

「はい！！」

気合いを入れ、それぞれ仕事に取りかかる二人。
だが、数時間後、先輩侍女は再びエリアに指導をすることになる。

ーーーーーーー

ドンドン！

「ちょっと！副隊長様もいらっしゃるのよ！静かにノックしなさい！」

エリアは副隊長の部屋のドアを無遠慮に叩く。
先輩侍女は怒りを露にしドアを開け放している。

「まぁまぁ。どうしたんだい？エリアちゃん」
穏やかな感じの副隊長は先輩侍女の肩を押さえながらエリアに優しく問いかける。

「あの！ガルシア様に住み込みで頼むって言われちゃった！」

「「……えっ！？」」
エリアの発言に固まる二人。

「あのガルが？あいつ以外に手が早いな…」

「ちょっと！なに呑気に言ってるのよ！あり得ないわよ！いきなり住み込みなんて。間違いじゃないの！？」
おろおろしているエリアを放って置き二人で言いあいを始める。
だが、それは問題の人間によりすぐ中断させられた。

「間違いではない」

簡素な服に着替えたガルシアがそこにはいた。

「急にいなくなったから心配した。部屋に帰るぞ」
エリアを抱き締めてチュッと額にキスを落とすガルシア。

「ガルシア様！恥ずかしいから止めて下さい」
真っ赤になりながら抗議するが全く取り合ってもらえない様だ。
ガルシアはエリアを抱上げ、
「邪魔したな」
と、言い部屋へと向かう。

「ガル、無理させるなよ～」

「バカ！」
副隊長は去っていくガルシアの背中に声をかけ先輩侍女に怒られる。

「さぁ、俺達も頑張るか？」

「…ふん！」
先輩侍女は真っ赤になりながら部屋へ消える。

騎士舎は今日も平和である

「嫌か？」

「嫌ではありませんが…」

「……」

「あの…ガルシア様、出来れば離して頂きたいです」

エリアはガルシアの腕の中だ。

逃亡先から強制連行されたエリアはベットに腰掛けたガルシアに抱き締められている。

逞しく鍛え上げられたガルシアの胸に顔を押し付けられエリアは顔が赤くなるのを感じている。

先程、先輩侍女に聞いた話を思い出しているせいもある。

「…分かった。エリアが嫌なら仕方ない」

ガルシア様はとても寂しそうに微笑むと私の頬を優しく撫でて下さる。

「だが約束してくれ」

ガルシア様は再び私を強く抱き締め耳元でささやく。

「他の男の世話をするな。例え騎士見習いでもだ」

低く心地よい声が私の心を揺らす。

あぁ。

私は何故ここに居るのだろう。

ガルシア様を恋しく想っても決して叶う事のない。

何故ガルシア様に出会ってしまったのだろう。

出会わなければこんな想いしなくてすんだのに。

私は知らぬ間に涙を流していた。

ガルシア様が優しく涙を拭って下さっていた。

「すまん。そんなに嫌だったか？泣くな…」

指で優しく拭うガルシア様。

前にもこんな事があった。

あれは私が両親に会いたいとぐずった時だ。

そうだ。

あの時、死んでいれば。

私の涙は止まらなかった。

また泣かせてしまった。
そんなつもり無かったのだが。

俺の腕の中で静かに涙を流すエリア。
頼む泣かないでくれ。
泣き止んでくれ。

指で拭っても拭っても次々流れてくる涙。俺はエリアの涙が見たいんじゃない。
エリアの笑顔が見たいのだ。

――――

「住み込みで頼みたいんだが」

「…えっ？！」
驚き声が裏返ったエリアも可愛らしい…

エリアを専属侍女として希望し、俺の願いはやっと叶った。
やっと手に入る。
そう思った瞬間、エリアはもうダッシュで走り去った。

騎士である俺が反応出来ないくらい素早い動きだった。
うむ。

俺もまだまだ訓練が足りないな。

さて、エリアは何処に行ったのか。
恐らく、ロイの所だろう。
副隊長であるロイの専属侍女であるカリアとエリアは仲が良い。
まるで本当の姉妹の様だ。
以前エリアに少し太ったか？と言った時、カリアが鬼のような剣幕で怒鳴りこんで来たときがあった。

「ガルシア様！エリアを泣かせないで頂きたいです！女性に対して太ったかなど！」

「エリアは痩せすぎだったから心配していたのだが…」

「言い訳は聞きたくありません！兎に角！ガルシア様と言えど、私のエリアを傷付ける事は許しません！」

呆然とするなかカリアはドアを勢い良く閉め去っていった。

私のエリア？
エリアは俺の物だ。

騎士隊長である俺に怒鳴る者は居ないなか、カリアは全く怖れていなかった。
それほどエリアを大事に想っているという事か…

それ以来、俺が長期不在の時はカリアにエリアの事を頼んでいる。

カリアに敵うものは居ないだろうから…

以前あったことを思い出しながらロイの部屋の前まで行くと、ドアが開いていた。

「「……えっ？！」」

男女のハモった声が聞こえ、ロイの勘違いな発言が耳に入る。
俺はまだエリアには手を出していない。

本当は押し倒しエリアを味わいたい。
男を知らないあの娘は一体どんなに甘い声を出すのだろうか。
男の下でどんなに乱れるのだろうか。

だが俺は本当にエリアに惚れてるらしい。
大切過ぎて手が出せないのだ。
だから頬や額へのキスで我慢している。

「間違いじゃないの！？」
カリアの悲鳴に近い叫び声が部屋に木霊している。
駄目だ。
これ以上エリアをこんなとこに置いとく訳にはいかない。

「間違いではない」

呆然とする二人を置き、俺はエリアを奪還することに成功した。
その後部屋に連れ帰りエリアを抱き締め匂いを堪能した。

専属侍女の事について聞くと、エリアは悲しそうな顔をした。
エリアが嫌なら仕方ないと諦める事を告げた。
但し、条件を付けて。
他の男の世話をしないこと。
するとエリアは涙を流し始めた…

escape from reality

あれからガルシア様は騎士舎に帰られていない。
結局、私はマティーに説得されガルシア様の部屋で住み込みで働く事になった。
それがガルシア様にとっても私にとっても一番良い方法らしい。
私は主の帰らない部屋で一人寂しく過ごしている。
暇潰しに掃除をしようと思ったがガルシア様の部屋は必要最低限の家具しか置いていない為、すぐに終わってしまう。

私は嫌われてしまったのかもしれない。
折角ガルシア様にお声をかけて頂いたのに逃げてしまった。
こんなめんどくさい女誰だって願い下げだろう。

先程、副隊長様にガルシア様はいつ頃お帰りになるか聞きに行ったのだ。
だが副隊長様は意外な言葉を口になさった。
「ん？ガルならここ2，3日任務は入ってないぞ。訓練だけだから毎日定時には騎士舎に戻ってるはずだ」
「あら？でもガルシア様最近帰ってらっしゃらないわよね？まさか、

街に下りてるんじゃ？」
カリアは眉をひそめている。
街に下りるとは金で女を買い抱く事だ。
「それはない。ガルはエリア以外に興味が無いからな。例え行っても何日も通うことはない。今までだってヤったらすぐ帰ってたしな」
「ちょっと！エリアの前で下品な事言わないでよ！」
カリアはドンと副隊長の背中を叩く。
私は喧嘩を始めた二人を残しマティーに相談するべく厨房へと足を向けた。

ーーーーーーーーーーーーー

「マティー、ちょっといいかな？」
「ふふっやっぱり来たね」
マティーは嬉しそうに笑い私を手招きし向かい入れてくれた。
「やっぱりって？」
「エリア、ガルの事で来たんだろ？」
「…うん。私、嫌われちゃった」
ポロポロと流れ落ちる涙。
マティーにあった瞬間、今まで我慢していたものが崩れた。

「なんでそう思うんだい？ガルが言ったのかい？」

「ううん。私が専属になってからガルシア様は帰ってらっしゃらないの。私がいる部屋には帰りたくないんだわ」

「だったら専属を変えるか通いの侍女にすれば良いだけだろ。何故ガルがアンタを手放さないか分かるかい？」

「何でだろ…」

マティーは辛抱強く私の話を聞いてくれる。

涙は段々弱まり、冷静に考えられる様になってきた。

そんな私の顔をマティーはグシャグシャと拭き、バシンっと背中を叩きニコリと言う。

「それは本人に聞きな」

「でも、ガルシア様が帰ってらっしゃらないと…」

「ガル！いつまで逃げるつもりだい？騎士隊長様が情けない」

マティーの大声に影からスッと現れるガルシア様。

……えっ？居たの？

In the Mattys' view

「頼む、傍に居てくれ…俺の傍に…」

泣きそうな、震える声。
ガルは強く優しくエリアを抱き締めている。

ガルが弱さを見せることはここに来てから一度も無かった。
上官からどんなに厳しくされても決して弱音も涙も見せなかった。
騎士隊長となってからはますます表情も感情も乏しくなっていった。

だけど、あの子がエリアが傍にいるときは違かった。
エリアを見る目は優しく、時より笑顔を見せていた。

精神的にも肉体的にも辛いときはエリアを傍に置き、優しく触れていた。

一時期荒れていた時期があった。
戦に自ら出向き、暴れまわっていた。
その時はだいたいエリアが絡んでいる。
専属侍女を断られた時、単身隣国に喧嘩を売りに行き当時の隊長にこっぴどく叱られていた。

あぁ。
この子には、ガルシアにはエリアが必要なのだ。
ガルシアは強い。
それと同時にとても弱い。

ガルシアには支えが、弱さを吐き出せる場所が必要だ。

あたしの自慢の息子。
ガルシア。
騎士隊長様だといえど、あたしの可愛い坊や。
あたしにさえ弱さを見せない子。
でも、見つけたんだね。
弱さを吐き出せる場所を

可愛い可愛いあたしの娘。
エリア。
よく生きていてくれたね。
よくあたしの元に来てくれたね。
悲しみを押し殺し笑顔を絶やさない子。
あの子にはありのままのお前を出していいんだよ

あたしの可愛い子達
幸せになっておくれ

extreme love

いつの間にか後ろに現れたガルシア様。
私はぽかんと口を開けたまま固まってしまっている。

「ガル、何時までも逃げるわけにはいかないよ。それに、早くモノにしなきゃいくら印を付けておいたって盗られちまうかもしれないよ」

盗られる？
印？
いまいち私には分からない単語がマティーの口から出てくる。

マティーはニヤニヤとガルシア様を見ている。
ガルシア様は眉間にシワを寄せ、私に目を向ける。

怖い・・・

私はガルシア様の視線から逃れるよう顔を背ける。
きっと『お前は必要ない』と言われるんだ。
専属をはずされるんだ。

しかし、ガルシア様は予想外の行動をした。

涙を優しく拭ってくださったのだ。
「・・・すまない。また、泣かせてしまったな」

私の目線に合わせ床に膝をつき、低い声で呟くように言うガルシア様。
ふとガルシア様の顔を見ると、とても切なそうな顔で私をみている。
私と目が合うと頬を包み込むように手を添え額にキスをして下さる。

「今までマティーの所で世話になっていた。俺が居たら嫌だろうから・・・」

「嫌ではありません!!・・・どうしてそう思われたのですか?」

私はキスされた恥ずかしさから目線を下げる。
すると、ガルシア様はまぶたにキスをしながら答えてくる。

「・・・俺はエリアを泣かせてしまう」

「ガルシア様のせいではありません!!私が悪いんです!!私がガルシア様の期待に応えられないから・・・」
私の目から再び涙があふれ出てくる。

「・・・エリア」

ガルシア様は私の名を呼び驚きの行動をなさった。

私の流れる涙を舐めはじめたのだ。
顔を無理やり上げ、頬を伝う涙を口付けるように拭い顎にかかる涙を舌先で舐めとっているのだ。

「!!ガルシア様!!」

私の涙は驚きで止まってしまっている。
だが、ガルシア様はなお執拗に私の顔を舐め続けている。
まさか、あのガルシア様がこんなことをなさるなんて。
普段冷静で寡黙な方で、他人に固執なさらないのに。
今まで黙って側にいたマティーが止めに入るまでガルシア様は唇以外の顔全体を嘗め回す勢いだった。

「ガル！！やり過ぎだよ！！そうゆうことはあたしの居ない所でやっておくれ。今はあんたの気持ちを言葉にすることが優先だ！！」
マティーはガルシア様から私を引き離そうとしたが、ガルシア様は決して私を離そうとはなさらなかった。
あろうことか、マティーに対して剣先を向けている。

「・・・邪魔するな」
ガルシア様の目はとても恐ろしく冷たいモノだった。
母親代わりであるマティーに剣を向けるなんて。

「ガル、あたしは邪魔はしない。けどね、エリアを傷つけるようならあたしはあんたでも許しはしない。今は、落ち着きな。エリアが怯えているよ」
マティーは決して物怖じせず、ガルシア様の目を見て静かに言う。
マティーの言葉にガルシア様は剣を収める。

「・・・すまん」
「ガルシア様・・・」

「エリア・・・頼む。傍に居てくれ・・・俺の傍に」

ーーーーーーーーー

あの後、ガルシア様は私を強く抱きしめ傍に居てくれと何度も呟いていた。

私は何も言えずにただガルシア様に抱きしめられていた。

その後マティーにより私はガルシア様に部屋に連れて行かれた。

ガルシア様はマティーにより騎士見習い達の大部屋に放り投げられていた。

「少し頭とソコ、冷やしな!!」

騎士見習い達は突然放り投げられた騎士隊長に驚き慌てふためいていた。

「明日からはちゃんと部屋に帰るだろう。今日一緒に部屋に帰ったらあんた喰われちまうからね。今日は一人で部屋に帰るんだよ」

マティーはよく分からないことを言いながら私をガルシア様の部屋まで送ってくれた。

その夜・・・・・・・

「隊長！！隊長！！マティーは何者なんですか！？隊長を片手で投げるなんて！」
「隊長！！エリアさんとはどういう関係なんですか！？」
「エリアさんに印つけてるんですよね！？」
「どこまでいったんですか！？」

騎士見習いの子達に囲まれ質問攻めにあっていた・・・
普段滅多に関わることのない隊長と話すチャンスをモノにしようとする子供達はすごかったそうな。

「ガルは奥手だからな。まだチュ～もしてないだろ」
「・・・何故ロイがいる」
「副隊長！？」
「副隊長はカリアさんとどうなんですか！？」
「俺はそれなりに・・・なぁ」
「おぉ~ 流石副隊長！！」
「まぁな～恋の相談は俺に任せろ！！ガルもな！！」
「・・・・・・」

「わぁ～～～～！！隊長が暴れ始めたぞ！！誰か止めろ～！！」
「副隊長が泡ふいてんぞ！！」
「マティーを呼べー！！」
「魔王召喚しろーーーー！！」

lust for Elia（前書き）

※15禁　軽く性的描写

lust for Elia

「・・・ただいま」
「お帰りなさいませ、ガルシア様」

次の日、のっそりと帰ってらしたガルシア様。
普段と変わらず無表情だが、どこか晴れ晴れとしたお顔をされている。
騎士見習いの子達と仲良くなれたのかしら？
ガルシア様は無表情で寡黙な方だからか、見習いの子達から怖がられている。
訓練では副隊長様や先輩騎士様の方が厳しく怖い方達なのだが、訓練以外ではとてもフレンドリーな方達なのだ。
歳の離れたお兄さんって感じらしい。
専属になる以前、見習いの子達に言われた事がある。

「エリアさんは隊長が怖くないんですか？いつも隊長のお世話をしてるみたいですが？」

何故か子供達は私とカリアには『さん』付けで呼ぶ。
マティーや他の侍女は呼び捨てだし、敬語なんて使わないのに・・・
貴方達は私達よりお偉いのですから呼び捨てで良いのですよと言ったが、未だ敬語で話しかけ『さん』付けのままだ。
しかも、私に敬語を使わないでくれと言ってきたのだ。
近くにいた副隊長様が言うには
『エリアちゃんはガルの印が付いてるからな。将来は上官の妻となる人に呼び捨ては出来ない・・・ってとこかな。いや～最近の子は

計算高いな～将来の事を見越して生きてるね～』

カリアも同様に理由かと問えばそれは違うと全力で否定されてしまった。

曰く

『カリアさんには一生勝てない気がする・・・本能が言っている・・・』

『あ～分かる。俺もそんな気がする。だが、俺はそんなとこにも惚れたんだけどなw』

カリア・・・何したの！？

話がずれたが、ガルシア様子供達に尊敬され怖がられている。

上官騎士としては誇り高い事なのだろうが、それでは寂しい。

いつか子供達と仲良くなれれば良いのだが・・・と思っていたが。

久しぶりに帰ってらしたガルシア様は両手に凄まじい量の荷物を持っていた。

「・・・ガルシア様、それらは？」

「・・・お前にだ」

「えっ！？」

驚く私をよそに、ガルシア様は荷物をベットに広げ見せて下さった。

ドレス、バック、靴、アクセサリー、花束、お菓子、壺・・・・・・

どれも高そうな物ばかりだ。

「ガキ共が色々言うから。どれが良いか分からんかったから全部買

ってきた」
ガルシア様は淡々と言葉を発し中身を出している。
「ガキ共？見習いの子達ですか？彼らが何を言ったのですか？」
私はワケが分からずそれらをただ呆然と見る。
「女はこういうのが嬉しいんだろ？気に入らんかったらまた買ってくる」
「・・・」
「エリア？」
「・・・いりません」
私は何故か悲しくなってきた。
私はそんなにもの欲しそうにしていただろうか。
他の女性にもこんなことをしてきたのだろうか。
何か黒いものが私の中をグルグルしている。
「・・・これでは不満か。もっと高級のがよかったか？」
ガルシア様は眉間にシワを寄せ、全ての物を魔術で焼き払ってしまった。
「！！違います！！私は・・・何も欲しくはありません。これがあれば十分です」
私はガルシア様の行動に驚きながら、耳にそっと手を伸ばす。
そこには、ガルシア様に頂いた片方だけのピアスがある。
「私にはあのような高価な物は不要です。私は貴族の令嬢ではありませんから・・・ただの侍女には不要な物です」
「・・・エリア」
ガルシア様は私をそっとベットに座らせ静かに抱きしめてくださる。
「すまない。女はああいうのを貰うと喜ぶと聞いてエリアも喜ぶと

思ったんだ」
低い声で静かに耳元で呟くように話すガルシア様。
私の胸は痛いほどドキドキしている。
「エリアはこれだけで不満はないのか？金はあるぞ、欲しい物は何でも言え」
ガルシア様は話ながら私のピアスをしている耳を舐め、甘噛みしてくる。
「んっ・・・わ、私は・・・ぁ・・・」
「エリア・・・もっと声を聞かせてくれ・・・」
ガルシア様は何かが外れたように私をベットに押し倒し首に顔を埋めてくる

番外編　encounter

「下ろして下さい、ガルシア様・・・」
「・・・・・・」
「う～・・・」
あぁ、米俵の気持ちってこんなんだ・・・
私は、ガルシア様に担がれそんな事を考え現実逃避をしていた。

今朝、ガルシア様に洗濯や掃除を頼まれた。
私は騎士見習いの子達も野外訓練に出ている為、手が空いていたので引き受けた。
子供達の野外訓練には副隊長のロイ様が出ているようで、ガルシア様はお休みらしい。

私はガルシア様がお休みになっている中、極力静かに掃除など済ませていく。
ガルシア様は昨夜、２週間ぶりに騎士舎に戻ってらした。
わが国の王の護衛で山を三つ程越えた国に行ってらしたのだ。
騎士隊長として毎日気が抜けない日々だったらしく至極お疲れのご様子だ。
護衛といってもわが国の王は元騎士団長を勤めていた程のお方なので然程厳重にしなくてもいいらしい。
なんでも、隣国の騎士一固体潰した経歴の持ち主だそうで・・・
だが、山を越えるとなると話は別。
山には多くの獣達が住み、山狗という住人達もいる。
山の民は多くを謎に包まれている。
町に下りてくることもなく、山で生涯を過ごすらしい。
こちらが何もしなければ、あちらも何もしてこないそうだが何分謎

が多すぎる。
こちらにとってはなんでもない事が、あちらの怒りに触れる事もあるようだ。
その為、山では常に気を抜けないらしい。

ガルシア様は私が掃除をしている間、ベットで毛布に包まり熟睡している。
時折、起きて私の存在を確認するとまた目を閉じてを繰り返している。
そんなガルシア様を可愛いなと思いながら、私は洗濯物を手に静かに部屋を出た。
洗濯は城の横にある川で行なう。
この川は城からも良く見えるし、騎士様達も定期的に見回りにいらっしゃるので安心していられる。

「やあ、エリアちゃん」
私が洗濯をしようと気合を入れていると、軽装備の騎士様がこちらにやってきた。

「ケイロ様。お疲れ様です、見回りですか？」

「うん、俺今日は当番なんだ。本当はガキ共の訓練に行きたかったんだけどね」
銀髪で青い瞳が美しいケイロ様は私より二つ上の好青年だ。
元は貴族の方らしいが、貴族のやり方に嫌気が差し騎士となられた方らしい。
立ち振る舞いが優雅だが、貴族特有の嫌らしさはまったく感じない良いお兄さんだ。

「ん～エリアちゃん洗濯か。最近、犯罪者が逃げ出したらしいんだ

よね。この辺も危ないから俺一緒にいてやるよ」
ケイロ様はそう言い、ごろりと草むらに横になった。
「ケイロ様、さぼりたいだけじゃないですか？ガルシア様に見付かったら怒られますよ？」
私はその様子を見て、クスクス笑いながら洗濯を始めた。
「・・・ヤバイかも。エリアちゃんが居るところに隊長突然現れるもんな。他見回りに行こうかな・・・でも、エリアちゃん一人にして何か有ったら俺隊長に殺される・・・」
ケイロ様は起き上がりブツブツと悩み始めた。

「ケイロ様、私は大丈夫なので。何かあったら叫びますので他を見回ってきて下さい」
「・・・でも何かあってからでは遅いんだぞ？」
ケイロ様は心配そうに私の顔を覗き込んでくる。
だが、ここに居る間に他で何かあったら困る。
「大丈夫ですよ。すぐ終わりますし。ね？」
「分かった。ちょくちょく見に来るから」
ケイロ様は私の頭をクシャクシャと撫で回し見回りへ向かった。

このとき、ケイロ様に側にいていただいたら運命は変わっていたのだろうか・・・
ある人物と出会い、ガルシア様の機嫌を損ね米俵の様に担がれる事も無く。
ついでに言えば、ケイロ様がとばっちりを受けることも無く・・・

番外編　encounter2

「ふぅ・・・ちょっと休もうかな」
予想より量が多かった洗濯物達。
三度目のケイロ様の見回りを見送った後、私は一息入れることにしゴロリと地面に横になる。
今日は天気も良く、暑いくらいだから午後に干してもすぐ乾くだろう。
地面は適度に暖かく、風や川の音が心地よい。
私は眠気に襲われうとうととし始める。
「ちょっとだけ・・・」
意識を少しだけ手放そうとしたときだ。

ガサガサッ

「！！？」

近くの草むらから音がしたのだ。
ケイロ様かと思ったが違う。
ケイロ様だったら声を掛けながら姿を見せるはずだし、イタズラをするような方でもない。

「誰？」
私は勇気を振り絞り草むらに向け声を掛けた。

「・・・・・・・・・」
「・・・・・・・」
「・・・」

だが、待てど暮らせど返事は来ない。
もしかして人ではなく鳥かなにかだったのか。
恐る恐る草むらに近づき覗き込む。

その時だ。
草むらから誰かが飛び出し私を押し倒してきたのだ。

「きゃっ！！」
「静かにしろ！！」

飛び出してきた人物はあちこちに傷を負った男だった。
ガルシア様よりは小さいが一般男性より大きめの青年。
私より少し年上だろうか。
マントを頭からすっぽりと被り顔は見えない。
「・・・女か」
「・・・」
男は私に馬乗りになったままじっくりと見た後ポツリと呟いた。
私は何と言っていいかわからず黙っていた。
というか、首元に刃物を突きつけられていて何も言えないのだが。
私たちは暫く見詰め合っていた。
あぁ、ケイロ様は肝心な時に役に立たないお方だ。と不躾な事を考えながら男を観察していた。

マントより少し覗く顔は先輩侍女達が好みそうな顔だ。
傷つき破れている部分から露出している身体は無駄のない筋肉。

ポツリ・・・

私の顔に男から流れる落ちてくる。
「あの・・・怪我の手当てしましょうか？」

「・・・お前、怖くないのか」
「？貴方は私を傷つけるつもりはないのでしょ？」
「・・・」
男は黙って私の上からどき、少し距離を置き座る。
私は起き上がり、ポケットを探り消毒液や包帯ガーゼなど取り出す。
見習いの子達は良く怪我をしてくるので私たち侍女は応急セットは常備しているのだ。
「とりあえず、応急処置しかできませんから。後で、ちゃんと医者に行ってくださいね」
私は男に近寄り、治療を始める。
男は初めは警戒していたが、黙ってされるがままでいた。
「お前、変わってるな」
「そうですか？」
「普通、襲ってきた奴を助けたりはしないだろ」
「怪我をしてる人は放っておけませんから。はい、顔を見せて下さい」
「・・・嫌だ」
私は頭の傷を見ようとマントを取ろうとするが、さっと避けられてしまう。
「大人しくして下さい！！」
私はエイヤ！！と男に飛び掛りマントを外すことに成功した。
「何をする！！」
「！！」

マントを取った男の顔は見覚えのある顔だった。
そう、今逃げている犯罪者の顔だ。

「あっ・・・」
「俺を警団に突き出すか？」
「・・・治療を」

私の応えに男は驚いた様子だ。
暫く沈黙が続いたが治療はスムーズに終わった。

「俺は何もしていないんだ」
「えっ？」
「俺は貴族殺しだと捕まった。だが、俺は貴族の奴らが殺された後たまたま通りかかっただけなんだ」

『上流貴族、殺される。犯人はみすぼらしい格好の若い男。金目当ての犯行か』

確か、新聞にはこう書いてあったはずだ。

「じゃあ、そう言えばいいじゃない」
「言ったさ。だが、身分を証明出来ない俺の事なんて奴らは信じない」
「身分？どうして？」
「俺は山狗だ」
「！！」
「それにこれは貴族同士のいがみ合いが生んだものらしいんだ。警団の奴らも気が付いているが貴族が怖くて俺を犯人にしたがっているんだ」
「そんな・・・」
「・・・お前がそんな顔をするな。そうだ、お前名前は？」
「エリアです。騎士舎で働いています」
「エリアか・・・いい名前だ。俺はルカ」
ルカはにこりと笑いエリアの頭を撫でると思わぬ事を言い出した。

「エリア、俺の嫁にならないか？」

「・・・・・・えっ！？」
「俺はエリアが気に入った。それに、傷つけてしまったからな。男として責任を取らねば」
傷？なんのことだろうと首を傾げているとルカさんは私の腰を抱き寄せ首に顔を埋めてきた。
「ここだ」
先程、刃先を突きつけられた時、かすかに切れていたらしい。
ルカさんはその傷を舐めてきたのだ。
「ルカさん！！やっ・・・・！！」
私は必死にルカさんを押しやるがピクリともしない。
「・・・エリア」
ヤバイ！！非常にヤバイ！！そう思った時だ。
ゴツン！！！
とても鈍い音と共にルカさんは私から手を離し後ろに倒れた。
「小猿が・・・」
そこには寝巻き姿のままのガルシア様が立っていた。
どうやら、ガルシア様がグーでルカさんの頭を思いっきり殴ったらしい。
「エリア・・・大丈夫か？」
「は・・・い・・・」
呆然とする私をよそに、ガルシア様は私のポケットから消毒液やら出し、念入りに手当てを始めている。

「・・・っ・・・てめぇ、何しやがる！！」
ルカさんはすぐさま目を覚まし、ガルシア様と距離を置く。
「小猿は黙ってろ」
「小猿じゃねぇ！！」
「ん？お前脱走中の・・・」
「猿が逃げたみたいに言うんじゃねぇ！！逃亡中と言え！！」

「ガルシア様、この人は・・・」
私がルカさんは犯人ではないと言おうとした時だ。

「エリアちゃ～ん！！危ないから早く城に帰るんだ！！って、あれ？」
ケイロ様が草むらから飛び出してきた。
「ケイロ、何のための見回りをしているんだ・・・」
「た、隊長・・・その・・・」
「・・・後で隊長室に来い」
「・・・はい」
怒りを露にしたガルシア様に逆らえるわけがなく、ケイロ様はしょんぼりと肩を落としている。
「で、何が危ないんだ」
「それが、あの犯罪者がこの辺りで目撃されたんですよ！！」
「犯罪者・・・こんな感じの奴か？」
「そうです！！まさに、こんな・・・あぁ！！こいつですよ！！」

ケイロ様は剣を取り出しルカさんに刃先を向け構える。
「エリアちゃん、離れて！！」
「ダメ！！この人は・・・」
私はルカさんの前に立ちはだかる。

しかし、次の瞬間にはケイロ様は地面とお友達になっていた。
「な、何故・・・？」
「今回は、貴族の喧嘩に過ぎん。こいつは関係ない。今、闇騎士達に裏を取らせている」
ガルシア様は私を抱き上げ、城へ足を向ける。
「ケイロ、小猿はマティーの所へ連れて行け。今頃警団の奴らが探しているだろうからな。マティーの所が一番安全だ」
呆然とするケイロ様とルカさんを置き、私たちはガルシア様の部屋に帰ったのだ。

番外編　encounter3

「・・・・・・」
「・・・・・・」
ガルシア様の部屋に帰ってきたが空気が重い・・・
「あの・・・ガルシア様」
「寝るぞ」
「あっ、はい。お休みなさいませ」
私はお邪魔になると思い部屋を出ようとする。
が、私はガルシア様に手を引かれた。
「キャッ！！」
「・・・ここにいろ」
「ですが私が居たらお休みになれないんじゃ・・・」
「・・・」
ガルシア様は私を抱きしめ目を閉じてしまった。
私は恥ずかしさと緊張で身動きが出来ないまま、ガルシア様の腕の中でじっとしていた。

「・・・お前が居ないと分かったとき焦った」
眠ったと思っていたガルシア様が不意に話し始めた。
「時々お前を確認していたがつい寝入ってしまった」
「ガリシア様・・・大げさですよ」
私はクスクス笑っていたが、ガルシア様はぎゅっと私を抱きしめた。
「お前を初めて見たときとても儚く、消えてしまいそうだった。いつも、目が覚めるとお前と会ったとこは夢なんじゃないかと思うんだ」
「ガルシア様・・・私はどこにも行きません。命の恩人であるガルシア様には返しても返しきれない恩があります。だから、私はガルシア様の前から消えたりしません」

「・・・エリア」
ガルシア様は満足そうに寝息を立て始めた。
私もつられて寝てしまったらしい・・・
薄れいく意識の中、トントトッンと不自然なノックの音を聞いた気がするが・・・
・・・・・・・・
・・・

「マティー、ガルシア隊長の寝顔初めて見ましたよ。俺、怖くて怖くて・・・」
何も反射しない漆黒の鎧を身に纏った男が深いため息を吐いている。
「ガルの？珍しい。あの子が人が居るのに目を覚まさないなんて」
「エリア嬢を抱きしめ、至極安らかな寝顔でした・・・俺あの場で自害しようかと思いましたよ・・・」
「あぁ、エリアが居たのか。まぁ、闇騎士であるあんただから起きなかったてのもあると思うけどね」
「俺、ガルシア隊長に報告しなきゃなんないのに・・・あれじゃ、起こせない」
「あっはっは！！あたしが起こしてきてあげるよ。なぁに、エリアを起こせば簡単さ」
「お願いします・・・」
その日、マティーの部屋では誇り高き闇騎士が肩を落とし頭を抱えている姿が見れたそうな・・・

数日後・・・
「エリア！！俺の嫁になれ！！山に帰るぞ！！」

ルカさんが、勢いよく食堂に突っ込んできた。
私は、マティーと共に騎士見習いの子達の食事の給仕をしていた。

「おい、山狗だぞ・・・」
「あぁ、あの犯人だろ」
「なんでここに居るんだ。しかも、エリアさんにあんな事言って・・・」
子供達はあからさまに嫌そうな顔でこそこそ話している。
ルカさんは、一瞬悲しそうな顔をしたが聞こえないふりをしているようだ。

「こら、そんなこと言わないの。ルカさんは犯人ではないし、失礼よ」
子供達の日常生活に置ける躾も私たちの仕事だ。
人を差別的に見ないよう教えなければ！！

「すみませんでした」
子供達はとても素直で良い子達ばかりだ。
ルカさんに頭を下げ謝ってくれた。
「・・・いや、気にしてない」
ルカさんは多少戸惑ったよう。

「流石俺の嫁だな。子供の躾もしっかりしている。俺達の子が生まれても安心だな」

・・・そんな爽やかな笑顔で怖いこと言わないで下さい。

「おやおや、小猿さんは旦那気取りかい？」
見るに見かねたマティーが私たちの間に割って入ってきた。

「・・・エリアは俺の嫁に来るんだ」
どうやら、ルカさんもマティーが苦手のようだ。

「そういえば、ルカさん誤解は解けたんですか？」
「ガルが闇騎士を動かして調べたからね。あっという間だったろう」
「そうですね」

流石ガルシア様。
貴族が関わる事件は何十年何百年と解決されないことが多い。
貴族同士の固執やらなにやら複雑すぎて手が出せないのだ。
だが、誰にも媚びへつらわず誰にも従わない騎士様が調査に乗り出せばあっという間に解決する。
しかも、あの闇騎士を使えばなおさらだ。
闇騎士とは世界に選ばれた騎士だ。
世界に選ばれるからには強さは勿論、個人の感情に流される事はない。
己の為ではなく、世界の為動くのだ。
よって、どの国に行ってもなんの法に囚われず行動できる。

そして、何故か数人ガルシア様に忠誠を捧げたらしい。
だが、ガルシア様は全て断ったとか。
その心意気に惚れガルシア様に命には闇騎士は従うとか従わないとか・・・

いくつか疑問があるが、そこはガルシア様だからだと納得するしかない。

まぁ、話を戻そう。
ガルシア様のおかげで解放されたルカさんは私を嫁に貰いにきたそ

うだが・・・

「エリアを嫁にするのは構わないが、山に行かせるわけにはいかない。そうすると、あんたが町に下りてきてもらうことになるけどねぇ」

「構わない！！俺はここで暮らす」

「だったら、きちんとした教育を受けてもらうよ。世間様に一人前の男と認めてもらえるまでエリアはやれない」

「・・・わかった。だが、どうすればいいんだ？」

「あたしの実家で面倒みてやる。紳士としての嗜みをみっちり教えるよう言っておく」

「エリア！！少しだけ待っていてくれ。すぐにエリアに相応しい男になってくる！！」

ルカさんは私を強く抱きしめる。

「だけど、先に他の男に取られても文句言わないでおくれよ」

「大丈夫さ、すぐ帰ってくるからな！！」

こうしてルカさんは花婿修行へと旅立った。

なんか、マティーに丸め込まれた感があるか私はあえて無視した。

そして数年後ルカさんが唐突に現れ嵐を起こすとは誰も思わなかっただろう・・・

番外編　encounter4

質素な部屋の中。
俺は今、最前線で戦っている。
俺の前には、哀れな子羊が狼に睨まれプルプルと震えている・・・
あぁ、失礼。ガルシア隊長が椅子に座り、ケイロ少佐が青ざめているんだ。

俺はガルシア隊長とエリア嬢のお昼ねタイムの後、ガルシア隊長に呼び出された。
隊長曰く、
「優秀な部下は失いたくない。いざというときは止めろ」
・・・・・・・・・・えっ！？
ガルシア隊長はそれだけ言いついて来いと背中を向けてしまった。
どういうことだ・・・
俺は不思議に思いながらガルシア隊長の後を追った。
普通なら俺の様な闇騎士は誰の命も受けない。
だが、ガルシア隊長は別だ。
まぁ、この話は別の機会に・・・

隊長室の前には既に人が立ち待っている様子だ。
あれは確か、ケイロ少佐だ。
貴族出身の騎士だったはず。
貴族特有の嫌味さがない気さくな人間だと高評価の青年だ。
その青年はガルシア隊長を見つけると青ざめた顔でピシッと敬礼をしている。
ガルシア隊長は軽く手を上げそれに応えるが無言で部屋に入っていく。
ケイロ少佐は今にも泣きそうな顔で部屋に入ろうとする。が、俺と

目が合うとまるで助けを請う様に見つめてきた。
俺は余りにケイロ少佐が哀れになり、黙って頷いてやった。
普段闇騎士はこんなことはしない。他人に哀れみをかけるなんて。
だが、ケイロ少佐は余りに哀れだ。
多分、呼び出された理由はエリア嬢絡みだ。いや、絶対に。
ガルシア隊長は普段私情を挟む事はありえない。
だが、エリア嬢のことに関しては別だ。
哀れ、ケイロ少佐・・・
まあ、ケイロ少佐はエリア嬢に兄の様に慕われているから殺される事はないはずだ。
・・・多分。

部屋に入ったガルシア隊長はどかっと椅子に腰掛ける。
俺はガルシア隊長の背後に控えることにした。
もしも、ガルシア隊長が怒りに任せ何か投げたらケイロ少佐の近くに居たら危険だからだ。

「ケイロ。何故、エリアを一人にした」
ガルシア隊長は低い声で話し出した。
「はっ！！申し訳ありません！！本日は見回り担当の為エリアの傍だけに居るわけにはいかなかった為であります！！」
ケイロ少佐は青ざめた顔で一気に言いきった。
「・・・ならば、俺を呼べば良かっただろ。今日は俺が非番なのは知っていたはずだ」
「わざわざ隊長を呼びに行くのは申し訳ないと思いました！！」
「他の人間を見回りにやり、貴様がエリアの傍にいる考えもあったはずだ」
「・・・申し訳ありません」
ケイロ少佐は今にも泣き出しそうだ・・・

ガルシア隊長ははぁ～とため息をつき立ち上がる。
「・・・1ヵ月の減俸だ。それと侍女達の水汲みなどの力仕事を全て行なえ。マティーには言っておく」
「はっ！！」
ケイロ少佐は罰が軽くすんで一安心のようだ。
だが、世の中そうは上手く行かない・・・

「ケイロ、後で訓練所に来い」
「へっ？」
ガルシア隊長はそれだけ言うと、颯爽と部屋を出て行った。

「幸運を、ケイロ少佐」
俺は呆然と立ち尽くすケイロ少佐の方を叩き部屋を出て行く。
「なっ！？どういうこと！！」
ケイロ少佐は俺の腕をがっちり掴み、泣き叫んでいる。
「すまない、こればかりは言えない。だが、一言だけ・・・」
俺はケイロ少佐の両肩をがっちり掴み・・・
「生きろ！！」
「・・・えぇ～～！？」
俺はケイロ少佐を置き走り去った。

生きろケイロ少佐！！
俺もあの地獄を味わったが、こうして生きている。
いや、あれを乗り越えられたからこそ今闇騎士としてやっていけてるのかもしれない。

俺はエリア嬢が間違って訓練場に行かないよう見張っていなければ。
あの地獄はエリア嬢にはきつすぎる。
それに、ケイロ少佐の名誉の為に！！

訓練所にて・・・
「ぎゃ～～～～～～～！！」

「おい、あの声ケイロじゃないか？」
「・・・そうだな。あいつやっちまったのか」
「可哀相に・・・」
何人かの騎士達の前には、ガルシア隊長の愛犬『ルガ』が楽しそうにケイロを追いかけている。
正しくは愛犬ではなく『愛狼』だ。
銀色の毛並みに大きな牙。ガルシアには忠実な狼だ。
勿論、ルガもエリアが大好きだ。
ガルシアとエリアにしか触らせない。エサに関してはエリアからしか食べないらしい。

その為、他者からすればルガはとても恐ろしい存在だ。
そのルガが全力でケイロを追いかけている。
勿論、ルガに捕まればただでは済まない・・・

「頑張れよ～ケイロ！！」
「あっ、こけた」
「・・・・・・」

仲間の応援も空しくケイロは足がもつれ転んだ。
ルガは至極嬉しそうにケイロに噛み付く。

「助けて～～～～～！！！！」

噂では、闇騎士はこの地獄を経験した者が多数いると云う・・・

Filled love

「すまなかった、エリア」
ガルシアは己の腕の中で顔を赤らめていエリアにそっと口付けを落とす。
すまないと謝っている割にはその顔はとても満たされ、微塵も悪いとは思っていないようだ。

「・・・ん」
エリアは先程までの激しい情事から回復していないようで、僅かに応えるので精一杯だ。
そう、この二人ついに男女の仲になったのだ。

『え～隊長まだエリアさんに手出していないんですか！？』
『あの隊長が・・・』
『噂では隊長に一度抱かれた女は他の男じゃ満足しないらしいぞ』
『流石隊長だな。ベットの上でも厳しいのか？』
『飴と鞭らしいぞ・・・』
『おいおい、お前らガルになら抱かれても良いとか言い出すなよ』
『・・・俺良いかも』
『・・・俺も』
『・・・まじかよ』
副隊長及び平隊員が訓練の休憩中の会話だ。

『確かに隊長の声、腰にくるもんな』
『あの声で耳元で囁かれたら俺イッちゃいそうだ～』
お馬鹿な隊員達はゲラゲラと大声を上げる。

『・・・おい』
『そうそう、こんな感じの低い声なぁ～』
『足腰立たなくなるまで扱いてやろうか？』
『・・・・・・・』
『・・・・・・・』
『隊長！！！？』
『・・・全力ダッシュ１００本』
『はっはい！！』
この後、城の騎士たちは使い物にならなく、闇騎士が城を護っていたらしい・・・

この話はあっという間に城中に広まり、勿論エリアの耳にも入っていた。
エリアはふとこの話を思い出し、あの噂は正しかったと納得していた。

「エリア、立てるか？」
「・・・無理です」
先程までの激しさからは想像できない程の優しさで接してくるガルシア。
エリアは恥ずかしさからシーツに埋もれる。
そんなエリアをガルシアは抱き上げる。
「きゃっ！？ガルシア様！？」
「風呂に入るぞ。そのままでは気持ち悪いだろ？」
「～～～～っ！！」
抵抗出来ないエリアに満足げに微笑み二人は湯殿へ消えていった。
その後、小一時間二人は部屋にはもどらなっかたそうな・・・

―――――――――――――

「最近ガル機嫌いいな。何かあったか？」

アレから数日後、ガルシアは仲間の騎士達と宿舎で食事をしていた。
月に数回地位も関係なく食事をするようにしているのだ。

ガルシアの右隣に座っていた副隊長のロイはふと聞いた。
「あれ？副隊長知らないんですか？」
左隣に座っていたケイロがニヤニヤと応える。
「何がだ？そう言えば最近カリアが不機嫌なんだよなぁ」
「隊長が機嫌良くて、カリアさんが不機嫌と言ったらエリアちゃん絡みに決まってるじゃないですか」
「確かに・・・！？ガル！！お前ついに！？」
「副隊長鈍いですね～」
「いや～良かった！！おめでとう！！・・・で、勿論合意の上なんだよな？」
それまで騒がしかった食堂は静まり返っている。

「・・・・・恐らく」
「恐らくってなんだよ！？」
「・・・エリアは嫌がっていなかった」
「強引に押し倒したのか？」
身を乗り出し根掘り葉掘り聞くロイ。
「・・・否定は出来ない。我慢出来なかった」
おぉ～～～～！！と盛り上る騎士達。
年配の騎士達は己の子供の様な二人が結ばれ涙していた。
純粋に喜び涙する者、可愛い娘が汚されたと涙する者がいたらしい。
「お前達！！変な話するんじゃないよ！！本人の居る前で！！」

そんな話はマティーにより強制終了された。
エリアは顔を真っ赤にし、マティーの背に隠れている。
エリアがこの場に居るのは当たり前だ。
騎士舎の食堂で行なわれる食事会では専属侍女達が給仕を担当しているからだ。
この場にはエリアは勿論、副隊長の侍女カリアや他の専属侍女達も複数いる。
歳若い侍女達はキャーキャー顔を赤らめながら話を聞き、年配の侍女達はにこやかに佇んでいた。

「副隊長様？ちょっと宜しくて？」
そんな中背後にどす黒い何かを背負ったカリアがロイの頭を鷲？みし食堂を出て行った。
「ありゃー自業自得だね。ロイは少し慎みを覚えるべきだね。ガル！！あんたもだよ！！」
マティーはガルシアの頭をぽかりと叩いた。
「ほらっ！！さっさとエリア連れて行きな！！」
「・・・分かった」
ガルシアはエリアを抱き寄せ静かに食堂を後にした。

「まったく！！これだから男は！！ほらっ！！あんた達もさっさと行きな！！」
マティーは残った騎士達を追い出し、専属侍女達にも釘を刺す。
「いいかい！！この事を言いふらすんじゃないよ！！」
「分かってるわマティー。可愛い妹の幸せを願わない姉が居て？」
侍女達はニッコリ微笑み己の騎士達に二人の邪魔をしないよう釘を刺しに行った。

「マティーガルシア隊長幸せそうだでしたね」

「おや？あんたいたのかい？闇騎士様は暇なんだね」
「暇じゃないですよ。これでも仕事中ですよ」
「仕事？こんな所でかい？」
「えぇ、国王から依頼されたんですよ。ガルシア隊長の様子を見てきて欲しいと」
「国王から・・・」
「はい、この様子だと良い報告が出来そうです。ガルシア隊長は幸せそうだと」
「そうだね。ガルはやっと我が儘を言えるようになったよ」
「国王も気になさっていたようです。あの出来事がガルシア隊長の未来を奪ってしまったのではないかと・・・」
静かな食堂でマティーと闇騎士は微笑む・・・

garcia's past

「ガルシア、貴殿を認め騎士の称号と主を定める権利を授けよう」

「ありがたき幸せ」

騎士見習いから1年半。
ガルシアは驚異的な速さで騎士の称号を王より授かった。

「して、ガルシアよ。主は決めているのか？」
まだ歳若い王はガルシアに尋ねる。
当時は騎士の称号を授かったら王を主とするのが主流だった。
まだ３５歳という未熟な王は己を主とするよう圧をかけていたのだ。

「恐れながら自分はまだ未熟です。現状では主とした者を護ることは出来ないと・・・」

「ガルシア！！私を主にする気がないのか！？」
王は怒り手元にあったグラスをガルシアに投げつける。

「恐れながら殿下。私に発言の許可を」
当時の騎士隊長がガルシアの前に進み出る。

「なんだ、申してみよ」

「はい。ガルシアは他人から認められてもまだ自分の力に自身が持てないのでしょう。これから実戦を経験していけば、いづれ自身を持ち王を主と定め、御守りすることでしょう」

「・・・分かった。もう下がれ」
王は不満げにも了解の意を示す。
過去、王は騎士隊長として何人もの騎士を育ててきたのだ。
見習いのまま終わるのも、騎士となってから力を発揮するもの、様々な者を見てきたため王も納得したのだ。

「ガル、もう少し言い方を考えろ。まぁ、主は決めてるんだろ？」
「すみません、隊長。俺達はまだお互い未熟です。だから、もっと強くならなければ・・・」
「まぁ良い。強くなれ。大切な者を護れるよう・・・」
「はい」

―――――――――――――――――――――――――――――――

「あの小僧め、私を愚弄するつもりか！！」
「陛下、恐れながらガルシアまだ幼い。そこを考慮して下さい。成長すれば自ずと分かるはずです」
怒り狂う王を側近がなだめる。
「貴様も私に逆らうのか！！」
「そのようなことは！！ガルシアを保護した者としての親心です！

！どうかご勘弁を！！」

そう、この者こそ親が居ないガルシアを保護し、育ててきたのだ。

「ふん！！まぁ良い。騎士隊長に伝えておけ。今度の戦ではガルシアにも参加させろと」

「そんな！？まだ早いです！！」

「これは命令だ。行け」

「・・・御意」

側近は静かに王の前から退く。

「すまない、ガルシア・・・」

小さな呟きを聞く者は居ない・・・

young a knight

「行ってくる、エリア」
優しく頭を撫でてくださるガルシア様。

「お気をつけて、ガルシア様」
私はそれだけしか言えなかった。

数日前、正式な騎士となられたガルシア様は隣国との領土をめぐる戦に駆出された。
我が若き王は隣国との領土をめぐる話し合いの席を蹴り、隣国に喧嘩を売ってしまったのだ。

『我が国が最強だ、誰にも屈しない』
剣先を隣国の王に突きつけ言い放つ若き王。

『若き王か・・・仕方ないな。少し灸を据えてやろうか・・・民には申し訳ないが』
隣国の王は何か考える素振を見せあろうことか剣先を素手でへし折り喧嘩を買ったのだ。

こうして、若き王は力や数で押し切り戦に挑んでいる。
対して、隣国は民に被害が行かないよう騎士の犠牲を出さないよう策をたて挑んできた。

これに巻き込まれガルシア様も戦に行かれることになった。

ガルシア様は小さく微笑み背を向け行ってしまう。

――――行かないで！！

言いたかったが、声が出なかった。

変わりに涙ばかりが溢れてくる。

　　　ワァオ〜〜〜〜〜ン！！

足元に座る大きな狼――――ガルシア様の愛狼が私の気持ちを代弁するように遠吠えをした。

私はただガルシア様の無事を祈り続ける。

――――――――――――――――――――

ー――――――――――――

俺は必ずエリアの元に帰るんだ。

俺にとって領土や王など、関係ない。

俺はエリアの為に戦うんだ。

エリアに二度とあんな悲しい思いをさせない為に・・・

エリアが居る場所は城から少し離れている騎士宿舎といえ危険な場所だ。

そのためエリアの傍を離れる先方ではなく城を護る後方の方が良かったが若き王の命令らしい。

俺は王の命令に従う気はなかったが、隊長命令も出たので仕方ない。
エリアの傍にはルガ―――巨大な愛狼―――を置いてきたから大丈夫なはずだ。
ルガはまだ幼いが戦闘能力はずば抜けているし、エリアに相当懐いているから全力で護るだろう。
それに、マティーもいるから平気だろう。

エリア待ってろ、俺はすぐ帰るからな・・・

数日後、ガルシア様は帰ってきた。
数人の捕虜である隣国の騎士を連れて・・・

「ガルシア様！！」
私は嬉しさでガルシア様に駆け寄ろうとする。
だが、何故かルガが私のスカートの端を咥えそれを許さなかった。

「ルガ？ガルシア様が帰って来たのよ？離してちょうだい？」
優しく頭を撫でてやるがルガは軽く唸り離してはくれない。
そうしている間にガルシア様は私の前を通り過ぎようとした。

「ガルシア様、お帰りなさいませ」

「・・・・・・」

ガルシア様は私に冷たい目を向け何も言わず捕虜を連れ去ってしまった。

「・・・ガルシア様・・・」
私は何がなんだか分からなかった。
いつでも私の問いかけに応えてくれたガルシア様が・・・
ガルシア様があんなに冷たい目をしているなんて・・・・

「エリア、あまりガルに近づくな」
「隊長様・・・」
そんな私に声をかけて下さったのは騎士隊長であられるセナフォン

様。

「ガルは初めての戦で気が立ってるんだ。今あいつはちょっと危ないからな」

「・・・そうですか、申し訳ありません」

私はガルシア様が無事帰って来たことに安堵しつつとても不安だった。

ガルシア様が戦を機に変わってしまうのではないか、私が必要とされないのではないかと・・・

――――――――――――――――――――――――――――――――――

「馬鹿な！！ガルには荷が重過ぎる！！俺が変わりに！！」

「ダメだ、我はガルシアに命じているのだ」

「しかし・・・」

「同じ事を何度も言わせるな。下がれ」

若き王は俺に残酷な命を下された・・・

「ガル、王の命令だ。捕虜の首を刎ねろと・・・・」

「・・・・・・」

「すまない、俺が変わってやりたいが・・・・」

「平気だ・・・・」

ガルは俺の話を静かに聴いていた。
初めてに戦で多くの人間を殺したガルシア。
何も殺さなくても良い戦だった。
だが、王の命令は残酷だった。

『殺せ、だが数人は生きたまま連れて来い。面白い事をしよう』

この命に逆らえば俺達の命がない。
俺は部下を護る為捕虜を数人連れてきた。
その捕虜の首を生きたまま刎ねろと・・・・

この役目は普通であればそれなりに訓練された暗殺部隊が行なうか、隊長である俺だ。
だが、ガルの事を相当根に持っているらしい。
ガルにこの役目をやらせる気だった。

今のガルははっきり言ってヤバイ。
あのエリアの声にも反応しなかった。
あの時、ルガがエリアを止めなければ最悪エリアを切り殺していたかもしれない。
俺も初めて人を殺した時はあんな感じだっただろう。

このままではガルは壊れてしまうかもしれない・・・

A woif knight

「ねぇ、ルガ・・・ガルシア様大丈夫かな？」
ベッドの上でルガを撫でながら問う。
ルガは私の目を見つめ心配するなとでも言うように鼻を顔に擦り付けてくる。

ルガはとても賢い子だ。
ある日突然ガルシア様が拾って来たのだが、当初はガルシア様にでさえ牙を向けていた。
お互い傷つきあいながら絆を結んでいったのだ。
当初は私は危険だからと言って会わせてもらえなかった。
だが、私とルガは急な顔合わせをすることになったのだ。

「ルガが逃げたぞー！！」
「追え！！」
「馬鹿！！俺達が追われるんだ！！逃げろ！！」

わぁーわぁーと男達の声が訓練場の方からしてくる。
私は川でまだ騎士見習いにもなれない小さな男の子の面倒を見ながら洗濯をしていた。

「何かしらね？」
「エリアお姉ちゃん、見てきて良い？」
「良いわよ。気をつけてね」
「うん！！」

訓練所で騒ぎがあるのは何時もの事だ。
やれ、ルドが鼻血を出したの、シアンが訓練を逃げたの・・・
だから私も気軽に男の子を見送ったのだ。

「わぁーーー！！」
洗濯を再開して暫く、様子を見に行った子の悲鳴が聞こえたのだ。
私は慌ててその子の姿を探した。

「エル！？どうしたの！？」
「お姉ちゃん・・・」

男の子ーエルの前には巨大な犬がいた・・・
ハァハァと口を開け鋭い牙が覗いている。
私は咄嗟にエルを背に庇う。

「エル！！逃げなさい！！」
「でも・・・」
「早く！！」
エルは泣きながら草むらの方に走っていく。
私はエルが犬の視界に入らないよう立つ。

私と犬は互いに睨みあい動かない。
犬は巨大だが、まだどこか幼さがあるようだ。
よく見てみれば、犬にしてはちょっと違うような・・・
もしかして・・・

ガルシア様は狼を拾ったと言っていたような。
犬として見れば十分成犬だが、狼にしてはまだまだ小さいと・・・

「貴方、ルガ？」

私は出来るだけ優しい声で問う。
きっとこの子は怯えているのだ。
この子はエルと同じなのだ。
親を亡くし誰に甘えて良いのか分からないのだ。

「おいで、大丈夫。ルガ」
私は身を低くしそっと手を差し伸べ名を呼ぶ。
すると、ルガは耳をピンと立て私をじっと見、突然こちらに駆けてきた。

「きゃっ！！」
私は思わず目を瞑ってしまった。
恐らく来るであろう衝撃に身を堅くしていたが、そんな様子は一向にこない。
おかしいと思い恐る恐る目を開けると・・・

ルガは仰向けに寝転がり嬉しそうに私を見上げている。
私は呆然とその様子を見ていたが、ルガが痺れを切らしたように前足で私の足に手を乗せてきたのだ。
まるで早く撫でろと言わんばかりに。
私はその可愛さにクスリと笑いルガのお腹をワシャワシャと撫で回した。
幼年期特有の柔らかい毛が気持ちいい。

「エリア！！」
私が暫くルガと戯れているとガルシア様が慌てた様に飛び込んで来た。
「ガルシア様！！」
「大丈夫・・・な様だな」
ガルシア様はガクリと膝を突き大きく息を吐いた。

「エルが泣きながら来たんだが、泣くばかりでな。先程ルガが逃げたからもしやと思って来たんだが」
良かったとガルシア様は私をぎゅっと抱きしめてくださる。

「ガル、エリアは・・・大丈夫なようだな」
騎士の方々も後から姿を現した。
「ガルシア様恥ずかしいです！！」
私は抵抗したがガルシア様は離して下さらない。

「それにしても、ルガどうしたんだ？人間嫌い克服したのか？」
そう言い騎士の一人がルガに手を伸ばす。
しかし、ルガは威嚇も無しにその手に食いついた。

「ぎゃー！！」
騎士は悲鳴を上げ泣き喚いている。
「ルガ、止めろ」
ガルシア様がルガを止めようとするが、あろうことかガルシア様に威嚇をしだしたのだ。
低く唸りながら私たちの間に鼻をグリグリと突っ込んでいる。
まるで、離れろと言っているように。
ガルシア様は不思議に思いながら私から離れる。
するとルガは私にすりより尻尾を振っている。
「ルガ・・・お前」
ガルシア様は私に手を伸ばすが低く威嚇し近寄ることさえ許さない。

「ガルシア、ライバル出現だな」
うなだれるガルシア様に隊長様が肩を叩く。
「ペットは飼い主に似るって言うからな」

「？」

私は不思議に思いながらルガを撫でていた。
それから一ヶ月程ルガは私にべったりだった。

以後、ルガは触らせるのはガルシア様と私。食事に関しては私からしか摂らなくなった。

commanding officer's eyes

一度動き出した歯車は止まらない・・・・・・

捕虜を捕らえて2日間、昼夜を問わず拷問は行なわれ公開処刑は行なわれた。
捕虜はガルシアと同じくらいの若い青年だった。
泣き叫ぶ青年、ざわめく民、嘲笑う王。
ガルシアは何の感情も表さず剣を持ち青年に近づく。

「青年よ、怨むなら貴様の主を怨むんだな!!ヤレ、ガルシア」
嬉しそうに言い放つ王。

ガルは静かに青年の元に膝を付き耳元で何かを囁いていた。
すると青年は叫ぶのを止め何かをガルに囁き返していた。
何度かやり取りをした後ガルは立ち上がり静かに剣を振り下ろした。

一瞬の静寂の後、ゴロリと落ちる青年の首。
民の悲鳴が広がるなか、王は声をあげ笑い青年の頭部を思いっきり踏みにじって去って行った。

俺は青年の血を浴び動かないガルから剣を奪い、部下達に指示を出す。
「レオ達は民を。オレガ達は死体を廃棄!!」
だが、それをガルが遮る。

「待ってくれ」
ガルは静かに青年の頭部を持ち上げ身体の傍に置き、手足を縛っていた縄を解き手を組ませる。
「せめて、弔ってやりたい」
ガルは青年の手に剣を持たせてやり敬礼を送る。
俺達もそれに習い敬礼を送る。
ふと気づくと先程までざわついていた民達も手を組み青年の為に祈りを捧げていた。

「青年は丁寧に弔い火葬後は国に帰してやる事とする。おい！！闇騎士！！居るのだろう！！頼みがある」
俺は民衆に紛れているであろう闇騎士を呼ぶ。

「・・・」
予想通り闇騎士は居た。
光をも反射しない漆黒の鎧を身に纏い静かに姿を現す。
「闇騎士は世界の均衡を護っていると聞く。ならば、戦中も国境を越える事は出来るな？」
「是」
「貴殿は現在隣国からの依頼でここに居るのか？」
「否」
「ならば、この青年の遺体を家族の許に帰してやって欲しい。彼は素晴しい騎士だったと」
「承知」

闇騎士は最低限の答えしか返さなかったがそれで十分だ。
闇騎士は静かにオレガの後に続き姿を消した。

「ガル・・・余り背負い込むなよ」
俺はガルの肩に手をかける。

だが、相変わらすガルは微動だにしない。
「ガル？」
ガルは寂しそうな顔でエリアが居る騎士舎の方を見ていた。
エリアには処刑を見せたくなかった為、マティーに頼み騎士舎に居させたのだ。

「・・・エリア」
ガルは小さく呟いた・・・・・・

その後、戦が終わるまでガルは何人もの人間を殺した。
殺らなければ、殺れるからだ。

ガルは完全に壊れてしまったのか・・・・・・

A blessing

戦は半年間続き遂に終止符が打たれた。

両者多くのモノを失った。

財産、豊かな自然、大切な人、心――

だが、得たものもあった。

己の失態を認め、支えてくれた周りの者に感謝する事。

仲間との絆。

他者との絆――

これから失ったモノ以上のモノを得られるだろう――

――――――――――――――――――――――――

「若き王よ、まだ気づかぬか？」

二人の王が対面している。

隣国の王が話し合おうと席を設けたのだ。

若き王は隣国の王が負けを認めに来たと思い喜んでいたのだが・・・

「何がだ！貴様こそ気づかぬのか？貴様の負けだと言うことが」

王は興奮し声を荒げる。

「落ち着け、若き王よ。まず、貴国の騎士に感謝しよう」
「感謝？」
「あぁ、以前貴国で処刑を行なったな？その際犠牲になった我が騎士の遺体を家族の許に帰してくれたことだ」
「何？そんなことしていないぞ！！」
「闇騎士が訪ねて来てな。そちらの騎士に頼まれたと。素晴しい騎士だったと家族に託も託されたようでな。喜んでおった」
「あいつら勝手な事を！！騎士隊長をここに！！」
若き王は顔を真っ赤にして叫ぶ。

「待たれよ」
しかし、それは第三者により遮られた。
漆黒の鎧を身に纏った闇騎士だ。

「遺体を運んだのは私だ。これはそちらの若き騎士の行動に感銘を受けた私が私の判断で動いた事だ。貴殿が若き騎士を罰せることは出来ない。これはこの世の理だ」

「ぐっ・・・」
若き王は歯を食いしばり怒りを抑える。
闇騎士の意思を曲げる事は出来ない。
闇騎士にこの世の理だと言われると誰であろうと逆らえないのだ。

「若き王よ、もう辞めないか？これ以上何を失う」
「貴様が負けを認めたら辞めてやろう！！」
「若き王よ、分からぬようだから教えてやろう、今の現状を」
「現状なら知っている！！我が国の死者は１０００、貴様は３０００！！領土も我が国が半数以上千慮している！！どうだ、さっさと負けを認めろ！！」

隣国の王は小さくため息をつき闇騎士に合図を送る。
「報告します。現在死者は若き王の言った十分の一です。なお、一般市民の死者は現在確認されておりません。領土の占領に関する事ですが、占領はされておりますがその地に敵国の騎士が在沖しているようですが、虐げられる事もなく普段の生活を送っています。騎士同士の戦いにおいて殉死した者は国に関係なく丁寧に弔われ埋葬及び家族の許に帰されております。以上です」

「そんな馬鹿な！！報告では我が国が圧倒していると！！」
若き王は訳が分からないという風に取り乱している。

「さて、そろそろ契約は終わりだな。迷惑をかけてすまなかったな、闇騎士よ」
隣国の王は闇騎士に礼を述べ若き王に向き直る。

「どういうことだ！！貴様、闇騎士を使ったのか！！」
「使ったのではない。貴殿も知っているであろう、闇騎士は誰の命も受けないと」
「では何故！？」
「私は闇騎士に頼んだのだよ。民を護りたいと。我が国に民も、貴殿の民も」
「私の民？」
「そうだ。貴殿の護るべき民だ。それにこの契約を持ちかけたのは貴殿に騎士達からだ。それに賛同した我が騎士達が私に言ってきてね」

「契約内容は情報操作及び戦の終戦。どちらかが勝つのではなく、平和的解決」
闇騎士は静かに話し出す。
「公開処刑が行なわれた日、ガルシアと言う騎士に頼まれた。平和

的にこの戦を終わらせたい。自分は全てを失っても構わない。だが、愛しい者だけは護りたいと」

――――――――――――――――――――

「闇騎士よ、貴殿達は世界の均衡を護っていると聞いた。そこで頼みたい事がある」
ガルシアと言う騎士はそう俺に話しかけてきた。
本来俺達闇騎士は個人の頼みは聞かないが、この時この騎士に興味を覚えていた。
敵国である捕虜を弔い家族の許に帰して欲しいなんて言う人間なんて始めて見たためだ。

「話は聞こう」

ガルシアは小さく頷き話始めた。

「俺は護りたい者が居る。騎士としてではなく、一人の男として。すまない、これでは個人の頼みだな・・・」
ガルシアはクシャリと顔を覆う。
「構わない、続けろ」
俺は壁に背を預け話を促す。

「その者は己の事よりも他者ばかり気にかける。己がどんなに傷ついても他者を護ろうとする。俺はそんなあの子を護りたいと思ったんだ。あの子の悲しむ姿は見たくない。あの子には笑っていて欲しい。だから、この戦を終わらせたいんだ。頼む、力を貸してくれ」
ガルシアは静かに頭を下げてきた。
正直驚いた。騎士が頭を下げるなど・・・

「世界に均衡を保つ者として応えよう。貴殿に頼みは受け入れられない」
「・・・そうか」
「だが、世界の均衡を保つ者として貴殿の若き王を放って置く訳には行かぬ。よって、貴殿の想いは聞かなかった事とし、この戦は闇騎士の判断により平和的に解決出来るよう勤めよう」
「・・・良いのか？」
「俺も人間だからな、多少感情に流されるさ。お前、その子の事好きなんだな」
「・・・あぁ」
意外だった。からかったつもりが恥ずかしげもなく肯定しやがった。聞いたこっちが恥ずかしい・・・
「でもよ、お前この身が朽ちてもって言っただろ？それじゃあ、その子が悲しむんじゃねぇ？お前その子が悲しむ姿見たくないんだろ？だからさ、もっと自分を大事にしろよ」
俺は思わず本性を出して話してしまった。
なんかこいつ見てると弟を思い出してしまう・・・

「あぁ、ありがとう」
ガルシアは驚いたようだったが、小さく微笑み礼を言ってきた。
こいつは良い騎士になりそうだな・・・
さぁ、仕事しますか。

「さらば、若き騎士よ」

俺はガルシアに別れをつげ、急ぎ隣国に足を向けた。
遺骨を遺族に届け、隣国の王に契約を持ちかけた。

戦の情報操作及び平和的解決を。
王は快く引き受け今に至る

―――――――――――――――――――――――――――――

「そんなことが・・・ガルシアをここへ・・・・」
若き王は頭を抱え黙り込んでしまう。

暫くするとガルシアが姿を現す。
その姿は以前と大きく変わっていた。
目は鋭く表情は全くなく、まるで誰も信じていない様な・・・

若き王はそんなガルシアの姿を見、後悔していた。
「ガルシア、私は以前お前に問うな・・・主は定めたか？と。お前はまだだと言ったが。本当はどうなんだ？」

「・・・俺はあの子を護りたいだけだ。貴方を護るつもりはない」
ガルシアは若き王を見定めはっきりと言った。
「俺が欲しいのは称号や地位ではない。あの子を護る力だけだ」

「・・・すまなかった・・・すまなかった」
突然若き王は泣き崩れた。
「私が間違っていた。己の力の大きさを見せ付ける事ばかりに捕らわれていた。国は私だけのモノだと。違ったんだな・・・。国は民が居てそれを護る者がいて初めて成り立つんだな・・・」

「若き王よ。それだけでは国は成り立たないのだぞ」
隣の王は若き王の側に行き肩に手を置く。
「国は導く者が居なければ良きモノにはならない。貴殿も国の一部なのだ」

「あぁぁぁぁぁぁぁ・・・・すまない、すまない・・・・」
若き王はいつまでも謝り続けていた。

それから数年、国は多少荒れはしたが若く王は身を粉にして働き続けた。
その結果、民にも受け入れられ他国からは賢王とまで呼ばれるまでになった・・・

「お前達、もう私を主と定めなくていいぞ」

ある時、訓練を終えた騎士達の許に王が現れ思わぬ発言をした。
騎士達は突然の王の出現と言葉に思考回路が停止している様だ。

「今まで通り、主を定める権利は授ける。勿論、私を主と定めてくれるのならば大歓迎する。だが、私意外でもいいのだ。例えば・・・」
王はチラリとガルシアに目をやる。

「そう、愛しい女とかな」

王はニヤリと笑い去っていった。

「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
王が去った部屋では誰もがガルシアを見ていた。
「・・・なんだ？」
「ガル！！良かったな！！」
「これでやっとお前も一人前の騎士だな！！」
わぁ～！！と先輩騎士が騒ぐ中ガルシアは状況が飲み込めないようだ。
「ガル、お前あの後エリアちゃんとちゃんと会って話したか？」
セナフォン隊長が静かに話しかける。
「いいえ・・・」
「お前も辛いかもしれないが、あの子も辛いんだぞ。マティーから聞いたんだがあの子毎日お前に会えないか訓練所に通っていたらしいぞ。何度もお前に声をかけようとしたらしいが、お前の迷惑にはなりたくないって遠くから見てるだけだったそうだ」
行ってやれ！と隊長に背を押されガルシアは先輩達を押しのけ駆け出す。
「おわっ！！何だ、ガルのやろう」
「青春さ・・・」
「？」

A hunter

「ガルシア様、元気そうね・・・」
エリアは戦が終わってから毎日訓練所に通っている。
共には勿論ルガを連れて。

「ルガ、貴方は行っても大丈夫よ?」
エリアは優しくルガを促す。
だが、ルガはエリアの傍を決して離れようとしない。

「貴方はガルシア様の邪魔になることはないわ。貴方は強いからガルシア様のお役に立てる。私は・・・」
エリアは静かに涙を流す。

あれからいったい何度涙を流しただろう。
ガルシア様の冷たい目を見てから私はガルシア様に声をかけることが出来なくなってしまった。
何時も、恐れていた。
『必要ない』
と言われることを。

私の命はガルシア様に救って頂いたモノ。
命の恩人に必要ないと言われたら、私の存在意義はないも同然。
しかし、私はそれ以上の感情を抱いてしまった。

ガルシア様が好き・・・

でも私は孤児で身よりもない。

一方ガルシア様は騎士様で将来隊長になるのは確実だと言われる方。
奥方となられる方は王族か貴族の令嬢方だろう。
私などあの方に愛される資格はない。
ガルシア様だとてそうだろう。
私の事など犬や猫を拾ってきた感覚なのだろう。

あぁ、叶わぬ恋などするのではなかった・・・
こんなに苦しいのならば
出会わなければ良かった・・・

静かに涙を流す私を心配そうに見上げてくるルガ。
「ごめんね、ルガ。帰ろうか・・・」
私は一度ルガに抱きつき立ち上がる。

「！！ワンッ！！」
突然ルガが耳を立て嬉しそうに尾Wを振る。

「ルガ？」
私は不思議に思いルガの視線の先に目を向ける。

「エリア！！」

「・・・ガルシア様」

そこにはガルシア様が居た。

訓練終わりなのだろう、簡素な鎧を身に付けたままだ。
私は向かいあったままお互い見つめあったまま動けなかった。
「エリア・・・無事だったか？」
そんな中ガルシア様が声をかけてくださった。
「はい、ルガが傍に居てくれたおかげで」
「そうか・・・良かった」
ガルシア様はルガを撫でご苦労だったと声をかけた。
すると絶対に私の傍を離れようとしなかったルガはワンと咆えどこかへ姿を消してしまった。
暫く、私たちはルガの後ろ姿を眺めていた。
しかし、静寂は突然破られた。
ガルシア様が突然私を抱きしめてきたのだ。
「・・・エリア」
「はっはい！！」
私は突然の出来事に驚き大きな声で答えてしまった。恥ずかしい・・・
・
「会いたかった・・・」
「ガルシア様・・・」
私はガルシア様の暖かさに泣きそうになった。
「ガルシア様、そんな事言われたら私、勘違いしちゃいますよ？」
「勘違い？」
「はい。・・・ガルシア様が私に好意を抱いていると」

自分で言っていて悲しくなってきた。
でも、こうでも言わなければ自分を保てなかった。
ガルシア様の口から否定されるより、自分で自分を壊した方が楽だから。

「ガルシア様は将来王族か貴族のご令嬢を奥方に向かえるお方。私などと戯れていてはガルシア様に名誉に傷がつきます。だから、これからは主と侍女として・・・」

私は泣きそうになるのを必死に押さえ笑顔で話すがそれはガルシア様により遮られた。

「勘違いではない。俺はお前が・・・」
より一層きつく抱きしめられる。
「お前と居ることで名誉が傷つくならそんなもの捨ててやる。主と侍女としてではなく・・・」

「ガルシア様！！」
私はガルシア様の言葉を遮った。
これ以上聞きたくない。
これ以上ガルシア様の重荷にはなりたくない。
これ以上苦しい思いはしたくない。

「身体が冷えてしまいます。早くお部屋に戻って湯に。準備してきますね」
「エリア！！」
私はガルシア様の腕を振りほどき騎士舎へと走る。

このときから私はガルシア様に対する想いに蓋をした。

ただの侍女として命の恩人に恩を返す為だけに居ようと。

だが、これがきっかけでガルシアの猛アタックは始まった。
狙った獲物は逃がさない、と言わんばかりに。
静かに、確実にハンターは獲物に狙いを定めた・・

stormily（前書き）

※18禁表現あり

stormily

「エリア、起きろ・・・」
ガルシアは腕の中で眠る女の頬に優しく触れ目覚めを促す。
「ぅ・・・」
女ーエリアは小さく身じろぐがまだ起きる気配はない。
無理も無いことだ・・・
時は昨夜にさかのぼる。

―――――――
「エリア・・・」
低く冷たい声色で名を呼ぶガルシア。
「はい、何でしょう？」
エリアは寝台を整えながら返事をする。
「・・・何故寝室が別なんだ。俺のベッドはこんなに広いのに」
「・・・・・・えっ？」
暫く動きを止めたエリアの腰を抱き寄せるガルシア。
「なんの為にこんなデカイベットを買ったと思ってんだ？」
エリアを抱きしめたままベッドに腰掛ける。
「・・・お前と寝る為だ」
「んっ・・・」
耳元で甘く囁かれ思わず甘い声をだしてしまうエリア。
そのまま二人は夜が更けてもなお眠りに付くことは出来なかったようだ・・・
―――――――

「・・・・・・」
ガルシアは無言のまま無防備に眠るエリアに覆いかぶさり甘く囁く・・・
「・・・誘ってんのか？」
「・・・起きます！！」
エリアは即座に目覚め起き上がろうとするがガルシアの身体はピクリともしない。
「あの・・・ガルシア様。起きるので退いてください」
「・・・身体辛くないか？休んでいてもいいんだぞ」
その言葉に顔を真っ赤にするエリア。
「へっ平気です！！」
「・・・そうか。俺に慣れてきたか・・・」
さらりとセクハラ発言をするガルシア。
さらに真っ赤になったエリアはガルシアの脇をすり抜ける。
「朝食の準備をしてきます！！」
素早く服を着て部屋を出て行くエリアを見送るガルシアの顔は今までは想像出来ないほど穏やかだ。

暫くして、ガルシアはなかなか戻って来ないエリアを迎えに食堂に足を向けた。
すれ違う仲間達に挨拶しながらエリアを探す。
ふと、外に目を向けると騒がしい様子であった為そちらに足をむける。

「エリア！！迎えに来たぞ～～～！！」

一人の男がエリアに向け叫び手を広げ走っていた。
ガルシアは迷わずエリアの前に踊りでて長い足でそいつを蹴り飛ば

す。
「エリア、下がっていろ」
いつの間にか他の騎士達も来ていてエリアを下がらせ盾になっている。
「何だ、お前は。我ら騎士に戦いを挑むか」
ガルシアは剣を向ける。
「違う、俺はエリアを嫁に貰いに来ただけだ！！」
男ははっきりと言い切りふんぞり返る。

「あちゃ～来ちまったかい」
声の主はマティーだ。
「マティー知り合いか？」
「小猿さんだよ」
「小猿？」
皆が頭を抱えるなかエリアは声を上げる。
「もしかして、山狗のルカさん！？」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
「あぁ～！！小猿！！」
暫しの沈黙の後皆が一斉に思い出す。
「暫く見ない間に変わったな～」
「男前になったな」
騎士達が口々に褒め称える中、ガルシアはエリアを抱き寄せ険しい顔をする。

「エリア、約束通り迎えに来たぞ。一人前の男になってな」
ニヤリと笑うルカ。

二人の男は火花を散らしにらみ合う。

「いや～青春だねぇ～」
「エリアちゃんはどっちをとるのかねぇ～」
「勿論ガルだろ～」
「いや、あいつも中々じゃないか？新しい刺激が欲しいのかもよ」

中年騎士達がのほほんと話をする。
今日も平和だ・・・・・・

misunderstanding（前書き）

軽く18禁で

misunderstanding

「・・・・・・」
「・・・・・・」

対立し睨み合う二人の男。

「俺はやっぱりガルだと思うね～ガルに１００！！」
「いや～小猿も中々いいんじゃねぇ？年齢的には小猿の方が近いんだろ？小猿に２００だ！！」
「俺はやっぱりガルシア隊長と幸せになって欲しいっす！！えと～・・・５０で」
「はいはい～掛け金は俺に寄こせよ～」
ケイロ様が布を広げ歩き回る。

周りでは騎士達がやんややんやと賭けをしている。
なんでしょうこの状況は・・・

「ルカとやら・・・貴様なんのつもりだ」
「さっきも言ったようにエリアを嫁に貰いに来た」

「・・・・・・」
ガルシア様は無言で剣を引き抜く。
ルカさんも腰から短剣を抜き構える。
じりじりと間合いを計る二人。

「止めないかお前達！！」
大きな声と共に振り下ろされるコブシ。

ゴン！！と痛そうな音と崩れ落ちる二人の男。

「エリアが困ってるだろ！！まったくこれだから男は・・・」
この場に現れた救世主、マティーはやれやれとため息をつく。

「あっ、魔王が降臨されたぞ・・・」
小さく騎士見習い達が振るあがり、ケイロ様が叫び声を上げながら走り去っていく。
あぁ・・・ルガが追いかけているのか・・・元気だな。と現実逃避をしてみる・・・

「で、ルカ。ちょっと早すぎやしないかい？ちゃんと一人前の男になってきたのかい？」
マティーが倒れ付すルカさんに聞く。
「あぁ！！マエサルさんのお墨付きさ！！俺は筋が良いらしくてあっという間に認められた！！」
自信満々に言い放つルカさん。
「本当かい？」
「勿論！！実践してみるか？」
「実践？」
首を傾げるマティーを尻目にルカさんは何故か私をひょいっと抱えあげる。
「流石にここじゃあなんだから・・・」
「「ちょっと待った！！」」
マティーと復活したガルシア様が必死にルカさんを止める。
「お前何する気だい！？」
「何ってナニだろ？」
きょとんとするルカさんからガルシア様は私を取り上げ
「貴様何を学んできたんだ！！」

――――――――――――――――

回想すること半年・・・・・・

「ふ～ん・・・君がマティーが言っていた山狗のルカ君か・・・」
ここはマティーの実家。そして目の前に立つはマティーの実兄マエサル。
ダンディーなおじ様だ。

「マティーが暫くぶりに手紙を寄こしたと思ったら・・・」
「おぅ！！俺を一人前の男にしてくれ！！」
「一人前の男ね・・・」
にやりと笑うマエサル・・・・・

「ところでルカ君。君は女性経験はあるのかね？」
「はぁ？俺はエリアしか興味はない」
「それではダメだよ。マティーは『一人前の男』といったんだろ？」
「あぁ」
「いいかい？『一人前の男』とは女性を喜ばせる事が出来て初めて認められるんだよ」
「はぁ・・・」
ルカはいぶかしみながら話を聞く。
「ルカ君の想い人はきっと誰にも手折られていない女性なんだろ？ならば君がリードしてあげなければ」
「そう・・・だな？」
「あぁ。初めての経験に不安がる彼女を優しく慰めなければ！！そのためにもテクニックをみがかなければ！！」
「おぉ！！」

マエサルの巧妙な話術に乗せられルカは・・・・・・・

その日ルカは初めて女を知った・・・

それからは盛りの男性には大喜びな日々が待っていた・・・

―――――――――――――――――――――

「俺は毎日エリアの事を想いながら何人もイかせた！！マエサルさんも俺を認めてここに送り出してくれた！！」

侍女仲間から後から聞いた話ではルカさんはコブシを振り上げ熱弁していたらしい。

私は途中から見習い騎士の子供達と共に食堂に追い返された。

話の内容を聞いても先輩侍女達は優しく微笑みお前は知らなくて良いことだと言う。

後でガルシア様に聞いてみよう・・・

―――――――――――――――――――――

「あの馬鹿兄貴！！なに勘違いしてるんだい！！」

マティーの顔は恐ろしかった。

ルカの話を聞いていると雲行きがおかしくなってきたことに気づいた俺は騎士見習いの子供達と共にエリアを食堂に帰した。

この手の話はまだガキ共には早すぎる。

騎士仲間達は楽しそうに聞いていたが・・・

俺は少々ルカの将来が心配になってきた・・・・

その夜部屋に帰ってきた俺にエリアは訊ねてきた。

「ルカさんは何を実践しようとしてきたのか？」と。

俺は思わず

「俺が実践で教えてヤルよ・・・」と。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8736k/

pure Love

2011年10月6日19時50分発行